

特集の趣旨

日本の敗戦から80年目を迎える2025年、従軍経験はもとより幼少期の空襲や疎開の記憶を保つ人々もごく少数となり、戦争経験の「記憶の時代」(成田龍一『戦争経験』の戦後史)はまもなく限界点に達しようとしている。この事実を受け止め、近年では当事者不在の時代に戦争経験を継承する意味とその方法が問われる一方、継承を声高に唱える過程で見過ごされた忘却による断絶が検証されてもいる。

継承すべき戦争経験とは、選択と排除からなる集合的記憶と密接に関わる。これまで人文学諸領域の研究は、加害責任を十分に論じないまま被害と犠牲の語り継ぎを再生産する「八月ジャーナリズム」が構築した戦後日本の「建国神話」を批判的に検討してきた。そのような「神話」を解体するために、日本の敗戦が誰にとってのいかなる敗北であったかを再構築する試みは、今日の文学研究においても一定の成果を収めている。

一方でそのような集合的記憶も、当事者不在の時代には新たな変容の局面を迎えるであろう。長く解体すべきと見做された「建国神話」は、それを支える当事者の不在により自壊するのであるのか。それとも直接的な経験と切り離されたまさしく「神話」として一層純化するのか。戦後80年とは「記憶の時代」の終焉後を見据え、従来の問題意識と方法論を批判的に検証すべき節目であると言える。

ナショナリズムとも容易に結びつく「われわれ」の記憶の力学に抗うためには、個人の語りという小さな歴史に注目し、大きな歴史の物語を問い直す視点が有効である。そのために日記、作文、書簡、手記、回顧録、自伝などの個人文書(いわゆる「エゴ・ドキュメント」)の可能性を探るのは狭義の学術研究だけではない。日本放送協会(NHK)が2021年度から五カ年計画で制作するシリーズ「新・ドキュメント太平洋戦争」では、「歴史研究のラストピース」である「エゴ・ドキュメント」の蒐集と分析に基づき「歴史の大きなうねりを『個の視点』で『複眼的』に」捉え直すことと謳われた(同企画「報道資料」)。同様に、個人の記録と記憶に着目した芸術実践や博物館展示、民間の事業活動は、学術研究に再考を促す斬新な成果を生んでいる。

このような動向にあって、作品の「自己語り」分析の方法を長年にわたり練磨してきた文学研究は、戦争に関わる文学的言説および広く一般的な言説を対象として、「われわれ」の物語に収斂しない個人の語りの意義を明らかにし、小さな歴史に着目する諸領域の研究を牽引できる立場にあるとも言えよう。

今日の世界情勢に目を転じれば、戦争は国際協調を揺るがす危機的事象である。しかしメディアが発信を続ける戦争の惨禍は、世界中の人々の胸中に苦悶と憂慮を募らせながらも、慌ただしい日常の中で類型化された記号として消費されてゆく。代替不能で個別的な生の実相を描き、他者の想像力と共感を喚起するものが文学だとすれば、文学研究はそのような文学とどう対峙し、戦争経験を繋ぐために何ができるであろうか。

日本の戦後80年を迎える節目の年に、戦争経験の継承可能性と不可能性をめぐる諸問題を共有し、戦争と文学の関係を追究する新たな足がかりとなることを目指して、本企画を提案する。(運営委員会)

プログラム

10.18
[土曜] 13:30~

【開場】
午後12時30分

《開会の辞》木村敏明

【会場】東北大学川内キャンパス A エリア 講義棟 C 棟 2 階 講義室 C200

《特集》「戦後八〇年」における戦争経験の継承可能性と不可能性

●発表

山本昭宏 現代日本の映画・アニメ・小説における戦争表象
——とくに高橋弘希「指の骨」と砂川文次「小隊」に着目して

五味淵典嗣 距離と感応——「ポスト冷戦」期戦争小説論に向けて

宋恵媛 植民地の時間と記憶——金石範・金泰生・在日朝鮮女性たちの「戦争」

●ディスカッション発議: 岡真理

●総合討論

10.19
[日曜] 10:00~

【開場】
午前9時30分

【第一会場】

《研究発表》

今藤晃裕 泉鏡花「化鳥」における〈自然〉

周佳正 宿命と心中の構造——泉鏡花『湯島詣』における『源氏物語』の構造と展開の撰取

武田悠希 利権を放棄する帝王——押川春浪口述「大蛮同盟」(『冒険世界』掲載)の結末

澤西祐典 芥川龍之介から堀辰雄へ——「マリヤのお告げ」等の芥川・堀旧蔵書から紐解く

山本歩 大泉黒石「天女の幻」論——怪談実話／実話怪談の側面から

【第二会場】

《研究発表》

松田祥平 探偵小説「黄金時代」の中で——一九三〇年前後におけるジャンルの量的拡大をめぐる

宮崎遼河 民間伝承を推理する——松本清張「Dの複合」とその周辺

肖瀟 「還元」されたオマージュ——夏樹静子『Wの悲劇』英訳におけるオリエンタリズムの両面性

岡野有吾 小松清『仏印の途』——植民地表象と語りの戦略

後藤田和 『部落解放詩集』をめぐる運動と表現の力学——被差別部落女性たちの「対抗的な公共圏」の形成

【第三会場】

《研究発表》

辻秀平 鎌倉文庫刊『文芸往来』の同時代的意義——戦前／戦後文学の交点として

芥川弘樹 安部公房『壁』論——ジャンルの破壊と総合の実践として

増田齋 「日本の精神風土」への抵抗——〈戦中派キリスト教作家〉としての遠藤周作

西田桐子 山田詠美『ベッドタイムアイズ』のヒップホップ——「黒人文化」受容と新たなウーマンリブ

坂口綾香 「家族再生」と自助の力学——柳美里『命』論

パラギナ・アレクサンドラ 青来有『爆心』論——記憶の風景としての浦上

《閉会の辞》久米依子